

クシャーンティ・アヴァダーナ

——『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第38章和訳——

引田弘道・大羽恵美¹⁾

解 説

忍屈仙人の説話については、最近、岡田〔2017〕がこの文献一覧を従来の研究に新しいパラレルを追加して一覧にまとめ、各話からモチーフを抽出して、必須モチーフを提示し、モチーフごとに各話を比較して系統分類図を作成している。そこでは、同じ『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』（＝『カルパラター』）でありながら、この説話は、この38章と29章の *Kāśisundarāvadāna*-にも認められることが指摘されている。この章の翻訳は別の機会を待ち、今回は38章のみを和訳する。この章のあらすじは以下の通り。

1. あらすじ

忍耐の賞賛。(1)

夜叉ウドゥンバの改心と仏教への帰依。(2-3)

インドラ神、釈尊の微笑みの理由を問う。(4-5)

仏陀の前世譚、クシャーンティラティ物語の開始。(6-7)

北国の王カリ、春の季節に女性と戯れる為に仙人の森に入る。(8-11)

王は宮廷の女性たちに囲まれていたクシャーンティラティ仙人を見ると、嫉妬と怒りから彼の手足を切り落とす。(9-13)

仙人は手足を切られても平然として怒ることなく、夜叉、ガンダルヴァたちに怒らないよう、さらには他の仙人に対しても報復の呪いをかけないよう、自制を促す。(14-16)

クシャーンティラティ仙人による真実語と傷の平癒、神々の賞賛。(17-18)

王は吹き出物で悩み、膿にまみれて地獄に墮ちる。(19)

過去世と現世の結合。クシャーンティラティ仙人は釈尊、カリ王はデーヴァダッタ。(20)

インドラ神の驚き、蓮華のように目を見開くと自身の天の住居に帰る。(21)

2. 真実語について

物語の比較検討は既に岡田〔2017〕によって詳細になされているので、ここでは真実語にのみ焦点を当てて考察を加えてみたい。

2.1. 『カルパラター』では、クシャーンティラティ仙人による真実語とその結果として傷が癒え、手足が元通りになったことを説いている。即ち、

「たとえ怒りを離れた私の手足が切断されても、怒りの衝動が (*vikāra-vego*) ないとするならば、その真実によって (*satyena tena*)、私の肉体は再び傷つけられない状態だけになれ。」と、彼は心を澄ませて言った。(17)

するとすぐに、真実の言葉の発露により、彼の手足はくつつき、傷は癒えた。(18ab)
同様の表現は **Saṅghabhedavastu** p. 10にも認められる。即ち、

「王よ、汝によって私の肢体が切り刻まれようとも、(私に)何の傷もないとするならば、私の身体は元通りになれ。」という、彼の真実の願いによって (satyopayācanayā), 身体は元通りになった。すると王は驚きで目を大きく見開き、次のような偈を説いた。

「あー、この誓いは (vratam) 成就した。あー、ダルマは立派に実践された。肢体が切り刻まれてもあなたに何らの心の動揺も (vikriyā) ないとほ。」カラブー王は後宮の女性、大臣、都の住民らと共に、その仙人の両足に頭をつけて挨拶をし、出発した。

真実語により切られた身体の平癒は漢訳仏典にも見受けられる。例えば、『賢愚経』巻2 (大正4, 360a)には、「我若実忍, 至誠不虛。血当為乳, 身当還復。」と真実の誓いを唱えると、血はすぐさま乳となり、身体は元通りになった。このような忍辱の証明(忍証)を見て、王は恐れおののき、「咄我無状, 毀辱大仙。唯見垂愛, 受我懺悔。」と懺悔した、とある²⁾。『六度実経』巻5 (大正3, 25a)には、王に手足を切られた兄が弟に対して、それでも王に対して怒りを覚えないと述べ、これが真実であれば、手足が元通りになるようにと宣言する。ここでは真実は「信」で表現されている³⁾。

この真実語は**第29章の Kāśīsundarāvadāna**にも登場する。クシャーンティヴァーディンは、彼の肢体を切り落としたカラブー王に対して如何なる敵対心もないという真実を誓う。

「それゆえ、王よ、あなたに対して私には如何なる心の動揺もありません。

この真実によって、私の血が牛乳になるのを御覧なさい。(29.76)

肢体の切断にあっても、私の心が平然としているのであれば、

この真実によって、私の他ならぬこれらの肢体がくつつくように。」(77)

以上の、清浄な心をもった彼の激しい**真実の願いにより (satyopayācanāt)**,

ほかならぬそれらの肢体は直ちにくつつき、健康な状態となった。(78)⁴⁾

さらに**第31章の Kalyānakāryavadāna**にも真実語は登場する。美德あるカリヤーナカーリン王子は悪徳の弟アカリヤーナカーリン王子により両目を抉られ放浪する。マノーラマー王女による婿選びのとき、王女はカリヤーナカーリン王子を見初め、王子に対する愛情の深さを宣言する。

王女の真実語は、

「もしあなたに対してだけ私の喜びがあり、心が他の誰にも存在しないならば、

その真実によって (tena satyena), あなたに穢れなき目が一つ生じますように。」(31.62)

この真実の力によって (satyānubhāvena) 満開の蓮の花のような目が王子に生じる。

さらに王子による真実語は、

「まさにこの私に、視力の損失に対してまったく敵意がないとすれば (nirvairah),

その真実によって、私のもう一つの目が元通りになるように。」(31.66)

この真実の願いにより (satyopayācanena), すぐさま彼に汚れなき二つめの目が生じた⁵⁾。

2.2. ところで、若原〔1990〕は「真実語」に関する従来の研究を紹介しながら⁶⁾、「それは何らかの真実を(多く証人としての神々や王の面前で)厳かに語る、若しくは、誓うことから成り、それがまさしく真実であるが故にその場で即座に或る奇跡的な効用が引き起こされるのである。その際に語られる真実は大抵の場合、語り手が自らのダルマ(宗教的であると世俗的であると問わない)を常に完璧に守ってきたという真実である。」と定義している。この真実語に関する文献は若原が指摘するように、ヴェーダ、ヒンドゥー、仏教の各文献に数多く見受けられ、インド宗教における重要な概念であると言える。また先にみた『カルパラター』に説く真実語は若原の定義に当てはまるものといえよう。

2.3. この「真実」という徳目に関して、興味深い物語を提供しているのが、『**ジャータカ・マーラー**』

中の「スタソーマ・ジャータカ」である。スタソーマ王子は善説語を語るバラモンを供養しようとしたとき、人食いのスダーサの息子がやって来た。王子は彼を教え諭そうとするが、反対に捉えられ彼の家に連れて行かれる。バラモン供養が完了していないのを悔やんだ王子はスダーサの息子に必ず戻ってくるから、一時解放してバラモンを供養させて欲しいと懇願する。王子曰く、

「実に私は戻ってくると約束した。私を悪人と同じように、このように疑うべきではない⁷⁾。

貪欲さにより、死の恐れにより、ある者たちは種々の**真理**を草のように捨てる。

しかし善人たちにとって**真理**は宝であり、生命である。そのため、苦難にあってもそれを彼らは捨てない。(31.22)⁸⁾

生命も、あるいはこの世の幸福も、**真理**から逸脱した(人を)悪趣から守らない。

誰がそれらの(生命などの)為に、満足・名声・幸福の宝庫である**真理**を捨てようか。」(23)⁹⁾

スダーサの息子は王子の言葉に疑いを持つ。

「本当に、この者は、**真実**を語ることに正義を守ることを自慢している。そこで先ず私は彼の**真実への愛着とダルマの愛好**を見てみよう。」¹⁰⁾

このように考えてスダーサの息子は王子に言う。

「私はお前の**真理の約束**(satya-pratijñatām)と正義を守ることを(dhārmikatām)見てみよう。」

菩薩は「承知した。」と彼に約束し(pratīśrutya)、自分の住居に帰った後、善説語(subhāṣita-)を聞き、バラモンを供養する。

王子の父王は、せっかく帰ってきた王子が約束を守って、再び人食いのもとに帰ることを良しとしない。父王は言う。

「それにもかかわらず、お前は彼(のスダーサの息子)の近くに行くことを約束した。だからお前は**真実を守って**、それを成就しようと望んでいる。」¹¹⁾

王は王子に、強力な軍隊と一緒に彼の下に行き、人食いを降伏させれば、約束を反故にすることなく成就し、なおかつ自身の保護にもつながると¹²⁾提案する。王子はこの提案を良しとせず、約束を守って人食いスダーサの息子のもとに帰った。これを見たスダーサの息子は感動して次のように思う。

「稀有の中の稀有、奇跡の中の奇跡である。

王のこの**真実の気高さ**は。(これは)人間、神をも凌駕している。(31.43)¹³⁾

死ほどの凶暴さを本性とする私に、恐れも動揺も制御して、

この者はこのように自ら近づいた。何という堅忍さだ。素晴らしい、**真実性だ**。(44)¹⁴⁾

彼が**真実を語る**という名声が広まっているのも当然のことだ。

というのも、**真実のために**この者は、このように生命も王国も捨てたから。」(45)¹⁵⁾

善説語(subhāṣitāni)を聞こうと願うスダーサの息子に王子は言う。

「悪鬼のようなゆがんだ行動をし、気高き¹⁶⁾道捨てたあなたに、

真理はありません。ましてやダルマがありますか。知識をもって、あなたは何をなさろうとするのか¹⁷⁾。」(31.49)

さらに菩薩である王子は、**真実**を守ることこそ、政治の道に適っていると言う。

「政治の道の実践に懸命な人たち、彼らは概して死後、悪趣に落ちます。

このような捻じ曲がった政治の道を捨てて、**真理を守って**、私はここに戻りました。(54)

それ故、私こそが政治に長けています。というのも私は虚偽を捨て去り、**真理を楽しむ**から。

というのも名誉・幸福・財が伴わないことを、賢者はそれをとっても実用的だとは言わないものだから。」(55)¹⁸⁾

スダーサの息子は**真実の言葉**(satya-vākya)にどんな利益の成就があるのか問う。これに答えて王子

は、**真実**は苦勞なしに福德を成就するので、苦行や聖地巡礼の苦難にも優り¹⁹⁾、また真理は世界に遍満する好機を与えられた名声が三世界に浸透するための道であり、神の住居に入るための門であり、輪廻の難所を渡りきるための架け橋である²⁰⁾。王子は最後にスダーサの息子に真実の誓いを守る為の条件として次のように言う。

「**真実を誓う者**でありなさい。生き物を害することを避けなさい。縛られたこの人たちを残らず解放しなさい。

人中の勇士よ、人の肉を食べるべきではありません。これらの気高い贈り物を（私に）与えなさい。」(31.80)²¹⁾

スダーサの息子は他の3つはともかく、人肉を食べないことだけは無理だと反論するが、王子は、

「あなたが人肉を食べるのを捨てなければ、王よ、
どうして**真実の誓い**や不殺生があるのでしょうか。」(82)²²⁾

このように**真実の誓い**は約束を守ることを基本とする。しかもこれは本人の名声を高めるだけではなく、苦行や聖地巡礼などの功德に優り、天界に行ったり、輪廻を渡る有効な手段でもあるのである。ところで真理を守ることは単に自身の誓い(vrata)の実践に留まらない。ダルマに合った生活を守ることも大切なのである。ましてや殺生はもつてのほかだと菩薩である王子は強調する。『カルパラター』という真実は自身の真実の宣言とそれに伴う神などの証明者による奇跡的現象が主たる内容であったが、『ジャータカ・マラー』は真実をダルマに並列すべき徳目として挙げ、その実践こそ有徳者に必須のものとして強調している。そこには証明者による奇跡的現象はもはや存在しない。

参考文献

- The Jātaka-mālā. Stories of Buddha's Former Incarnations, otherwise entitled Bodhisattva-avadāna-mālā by Ārya-śūra. Critically edited in the original Sanskrit by H. Kern.* 1972. Delhi: Indological Book House (1890).
- D'Intino, Sylvia. 2015. "Sacrifice et vérité dans l'Inde védique." *Journal Asiatique*. 303.1: 137-142.
- Meiland, Justin. 2009. *Garland of the Buddha's Past Lives by Arya-shura*, trns. by Justin Meiland. Clay Sanskrit Library. 2. New York University Press and JJC Foundation.
- Tucci, G. 1978. *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu*. Serie Orientale Roma. 49.2. Roma: Is. M. E. O. (= Saṅghabhedavastu).
- 岡田真美子(真水). 2017. 「忍辱仙人説話」『印度学仏教学研究』65-2: 810-817.
- 原 實. 1972. 「文武」『日本佛教学會年報』36: 1-31.
- 引田弘道・大羽恵美. 2015. 『ポーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第31章, 34章和訳『人間文化』愛知学院大学人間文化研究所. 30: 55-82.
- 若原雄昭. 1990. 「大乘仏典と真実語(satyavacana)」『宗教研究』283: 132-133.
- . 1994. 「真実(satya)」『佛教学研究』龍谷佛教学會. 50: 38-72.

和 訳

忍耐の賞賛

彼ら堅忍さを習慣とする人たちは敵に打ち勝つ。彼らは不変の光で奇跡が示されている。

というもシェーシャ蛇が²³⁾大きなヴィシュヌ神さえも(pr̥thu-bhāra-: brtan pa'i khur)²⁴⁾疲れることなく支えるように、善行にふさわしい彼らは、厳しい難題でも落ち着いて、忍耐を保持するから。(1)²⁵⁾

夜叉ウドウンバの改心

かつて功德がまったくないために、人々に震えを生じさせる、敵のウドウンバ (Udumba, Tib: U dum pa) という名のヤクシャは (人々を) 滅ぼすことだけの好機を窺っていた。(2)²⁶⁾

時機が至らぬ時に (akālakālam: dus min dus), 寄る辺のない人の縁者であり、世間の人を憐憫し、寂靜という名前をもつ世尊は、無理やりに²⁷⁾

学処の教えに帰依した (śikṣopadeśam śaraṇam prapaṇam: slab pa nyer bstan cing skyabs 'gro rab ldan) 彼の (ウドウンバ) を戒律に (vinaye: 'dul ba dag la) 結びつけられた。(3)

インドラ神の問い

その世間の苦しみが (bhuvanopatāpe: gdung ba) 静まると、喜んだインドラ神は (Nākapatiḥ: mtho ris bdag pos) 善逝に会おうと近づき、

遊行されている (善逝に) (saṃcāriṇam: rgyu ba la) 敬礼し、その時に微笑みを生じた世尊に以下のように言った。(4)²⁸⁾

「どうして訳もなく満開の月の弦が蓮華のような貴方の顔の上に輝くのでしょうか。これは奇蹟になります²⁹⁾。

善性の甘露の海 (という月) は (sattvasudhāsamudrā: snying stobs bdud rtsi'i rgya mtsho), 世間の人誰にでも共通して、理由なく微笑むものではありません。」(5)³⁰⁾

仏陀の前世譚、クシャーンティラティ物語

三十三天の主 (インドラ神) のこのような言葉を聞くと³¹⁾, あらゆるものを見通す (sarvadarśī: thams cad gzigs pas) 世尊は、

「この地で自分の前世譚を思い出して、私にこの笑いが生じたのだ、インドラよ。」と彼 (の神) に言った。(6)

以前、クシャーンティラティ (Kṣāntirati: bzod la dga') 聖仙が、怒りという罪を追い払って、この森に住んでいた。

彼が愛欲という激情 (ラジャス) を本性とする存在³²⁾について嫌悪しているのは、ちょうど月が蓮³³⁾を嫌悪するかのようであった。(7)³⁴⁾

北国の王、春の季節、女性と戯れる為に仙人の森に入る

さて、北国の王は春に森の中を見たいという好奇心から、

好色な (彼は) 後宮の女性たちを伴い、気晴らしのために、彼 (の仙人) の庵の近くの地に近づいた。(8)

カリという (Kalir: rtsod ldan) 名前の彼の王は欲情深く (rāgī: chags ldan), 美しい臀部ある女性たちとの戯れの際³⁵⁾,

女性が蹴ることで (花開くという) アショーク樹の (aśoka:- mya ngan med) 輝きと、女性が唾をかけることで (花が咲く) バクラの樹の (bakula:- ba ku la)³⁶⁾ 美しさを得た。(9)

あらゆる方角は、そこにぶんぶん飛び回る蜜蜂の群れによって暗くなった。

まるで (その群れは) 苦行の中断で苦行者たちの大きな怒りでしかめた眉のようであり、また愛欲の火の煙のようでもあった。(10)

赤い唇をした女性たちは、戯れで震えており、(重い) 乳房で前かがみになっているが、

それはまるで赤い若芽のあるつる草が、風で揺れ、つる草の東で前のめりになった³⁷⁾姿を (vilāsam: rol rtsed) しているかのようであった。(11)³⁸⁾

王、宮廷の女性たちに囲まれていたクシャーティラティ仙人の手足を切り落とす

宮廷の女性たちは (rājāṅganā: rgyal po'i btsun mo) 好奇心でぶらつきながら、森を歩いていると、不動の瞑想三昧に (-dhyānasamādhi: bsam gtan ting 'dzin) 没入した、貪欲を離れたその仙人を見ると、(彼を) 取り巻いた。(12)

さて、王はその場所に近づき、女性たちに囲まれている彼を見て、嫉妬 (īrṣyā: phrag dog) と怒りの火でよく調べもしないうちに (-durnirīkṣyaḥ: blta dka'), すぐさま彼の手足を切り落とした。(13)³⁹⁾

仙人は手足を切られても平然として怒ることなく、他者に対しても自制を促す

肢体を切られても彼は平常心を保ち、堅固さを保って王に対して決して怒らなかった。彼はヤクシャ・ガンダルヴァ・蛇 (-uraga: lto 'phye) 神の集団に彼 (の王) に対してよりひどく怒らないよう⁴⁰⁾制止した。(14)⁴¹⁾

そして王が自分の都へ帰ってしまうと、すべての仙人たちは森からやって来て、そこで四肢を切られた彼を見て、(もともと) 忍耐強いものたちであったが、怒りで震えた。(15) 呪いをかけようとした (śāpa-pradānābhimukhān: dmod pa 'debs la mngon phyogs)⁴²⁾彼らを制止して、彼 (クシャーティラティ) は「我慢すべきです。」(kṣāntavyam: bzod par bya) とだけ (彼らに) 言った。彼らの心は忍耐に (kṣamā: bzod pa-) 包まれていたので、怒りの行動と結び付くことはなかった。(16)

クシャーティラティ仙人による真実語

「たとえ怒りを離れた私の手足が切断されても、怒りの衝動が (vikāra-vego: nam 'gyur shugs ldan) ないとするならば、

その真実によって (satyena tena: bden pa de yis), 私の肉体は再び傷つけられない状態だけになれ。」と、彼は心を澄ませて言った。(17)

するとすぐに、真実の言葉の発露により⁴³⁾、彼の手足がくっつき、傷は癒えた。

忍耐の美德を持つその彼を、神は称赞と純質 (sattva: snying stobs) のように白い花⁴⁴⁾で供養した。(18)

王、地獄に墮ちる

王も罪という死毒によって出来た吹き出物がこすれて (普通の) 行動がとれなくなり、大量の膿の⁴⁵⁾渦に巻き込まれながら、宇宙の帰滅まで (samvarta-pākaṃ: 'jigs byed smin pa) 地獄に墮ちた。(19)⁴⁶⁾

過去世と現世の結合

前生でのクシャーティラティ仙人は私であり、カリ (王) はデーヴァダッタである。インドラよ、過去の出来事を思い出して、私にこのような微笑みが生じたのは、原因がないわけではないのだ。(20)⁴⁷⁾

インドラ神の驚き

このような世尊のお言葉を聞いて、彼 (のインドラ神) は、心を驚かせ、喜びで見開き、みなぎる力が

顕現した多くの目を (-nayanāvalīḥ: spyan gyi phreng 'dzin)⁴⁸⁾していた。

まるで多くの蓮華が太陽の光線に触れることで開花するかのようにであった。神々の主であるインドラは三十三天の住居に喜んで帰った。(21)⁴⁹⁾

作例解析

1. 「クシャーンティ・アヴァダーナ」の作例について

上記の解説を参照すれば、「クシャーンティ・アヴァダーナ」は多くの文献に説かれており、非常に広い範囲に流布したアヴァダーナであったことは明らかである。そのため、絵画やレリーフなどの芸術作品においても様々な地域で多くの作例が見られる⁵⁰⁾。ここでは先行研究ではほとんど言及がない、チベットにおける「クシャーンティ・アヴァダーナ」を説く文献と絵画の作例について述べてから、『アヴァダーナ・カルパラター』の蔵訳に基づいて表された軸装の絵画(タンカ)について解析を行う。

チベットの美術において「クシャーンティ・アヴァダーナ」の典拠となる最も重要な文献の1つに、カルマパ・ランジュンドルジェ (Rang byung rdo rje, 1284-1339) が編纂した『ジャータカ百話』(skyes rabs brgya rtsa)がある⁵¹⁾。これは、34章からなるアールヤシューラの『ジャータカマーラー』にカルマパ・ランジュンドルジェが後半部分のアヴァダーナを加えて100章にして編纂したジャータカの集成である。この前半部をなす『ジャータカマーラー』については、アールヤシューラとハリバツタが著者となる文献がそれぞれあり、チベット大蔵経の論疏部に所収されている⁵²⁾。チベットではこれらの34章からなる『ジャータカマーラー』は一般に、『三十四章からなる前生譚』(skyes rabs so bzhi pa)として知られている。カルマパの『ジャータカ百話』は六十章以上もの付加部分を含むだけにより大部となるが、こちらの方がチベットでは人気があったようである。

『ジャータカ百話』を表した絵画などの作例については、軸装絵画や寺院の壁画などに残っている。軸装絵画においては、百話ものジャータカの情景を含むことから、複数からなる絵画を一具として表す例が知られている。例えば、図1にあるように、中央に大きく釈尊の座像を表し、その周りに『ジャータカ百話』の情景を描きこむ例がある。この場合は21章から30章に相当する情景を含んでいるが、それらを除く章は、釈尊の座像とその周りにエピソードを描く同じ構図で、複数の他の画布に描かれ、それら全てで一セットとなり、全体で百話のジャータカを表す。

図1を例に挙げれば、「クシャーンティ・アヴァダーナ」は中央の釈迦座像の台座の左に描かれている(図2:図1の部分図)。釈尊の左に山が連なる表現があり、その下にクシャーンティヴァーディンが坐している。その左には右手で刀を振りかざす王がおり、左手には切り落としたクシャーンティヴァーディンの右手を持っている。『ジャータカ百話』では、王が自ら刀を執って、右手から切り落としたとするので、テキストの記述に基づいている⁵³⁾。その下には炎が燃え上がり、その前に世俗の男性と出家者が合掌して座っている。この炎はテキストに見られる、聖仙の身体が切断された後に、大地が裂けて王がその中に落ち、火炎が充満した場面である⁵⁴⁾。この火炎を恐れて、王に従っていた大臣たちは、クシャーンティヴァーディンに許しを請う。赤い火炎の中に白い裂け目があるのは、大地が裂けたことを表すと考えられる。

壁画の作例は、チベット自治区内のタシルンポ寺からほど近いシャル寺壁画に見られる。シャル寺にはチベット美術史において重要な壁画が多く残るが、その大回廊(skor lam chen mo)に『ジャータカ百話』に基づくそれぞれのジャータカを表す絵画が残る⁵⁵⁾。大回廊の外側の天井に近い部分に帯状の区画を二段設けて、それを区切った一つの区画でジャータカの一話を表わし、さらに一区画を上下半分に分けて、上半分に絵画を描き、下半分に銘文が記される。



図1 『ジャータカ百話』のタンカ」のうちの一幅

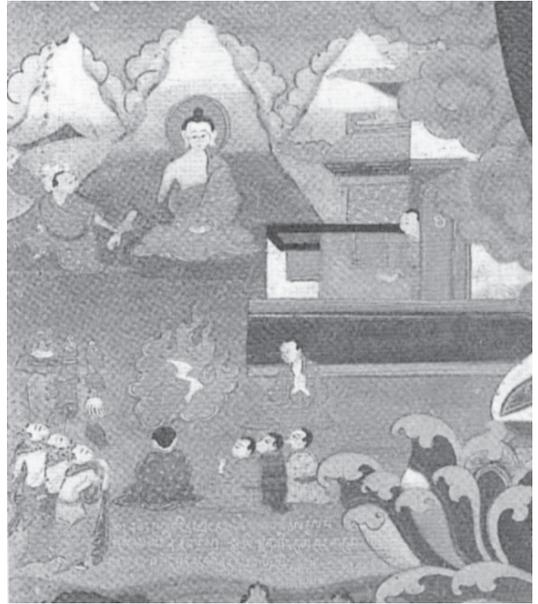


図2 『ジャータカ百話』のタンカ」のうち
「クシャーンティ・ジャータカ」
(図1左部分拡大図)



図3 ショル版『ジャータカ百話』のうち
「クシャーンティ・ジャータカ」

版画などの作例を挙げるなら、チベット自治区の首府であるラサのポタラ宮のふもとにあった印刷所(zhol par khang)で開版されたとする木版画の中にも『ジャータカ百話』に基づく各ジャータカを一景で表した作例があり、そのうちの一つに「クシャーンティ・ジャータカ」が含まれている(図3)。四角に区切られた枠の中の左側の、森を表す樹を背景に出家僧が坐している。その僧は落ち着いた様子で前にいる人物に腕を差し出している。右側に表された人物は左手でその腕をつかみ、右手は刀を振り上げてまさにその出家僧の腕を斬ろうとしている。この人物は頭に冠を着け、靴を履き、大袖の付いた長衣を身に着けているため、本アヴァダーナに登場する王を表すのであろう。また、枠内下部に表される花はこの物語の舞台が春の森の中であることを表すと考えられる。

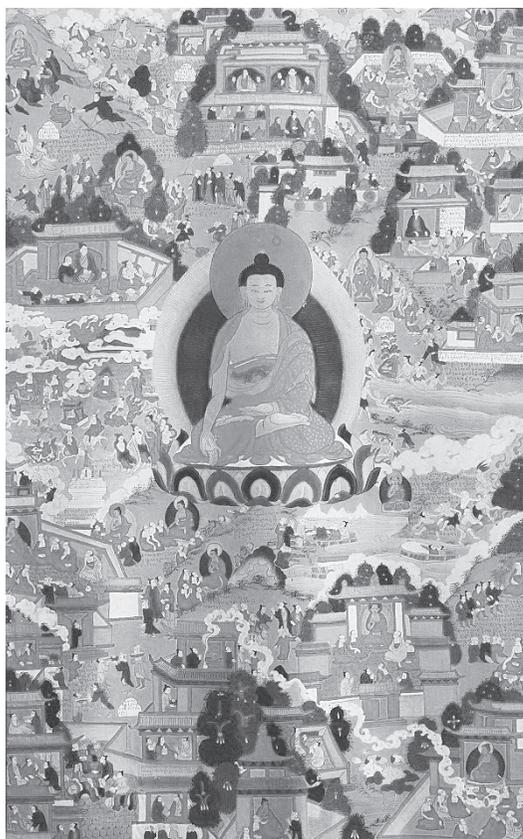


図4 「ナルタンのタンカ」
Tibet House New Delhi 蔵 「右12」

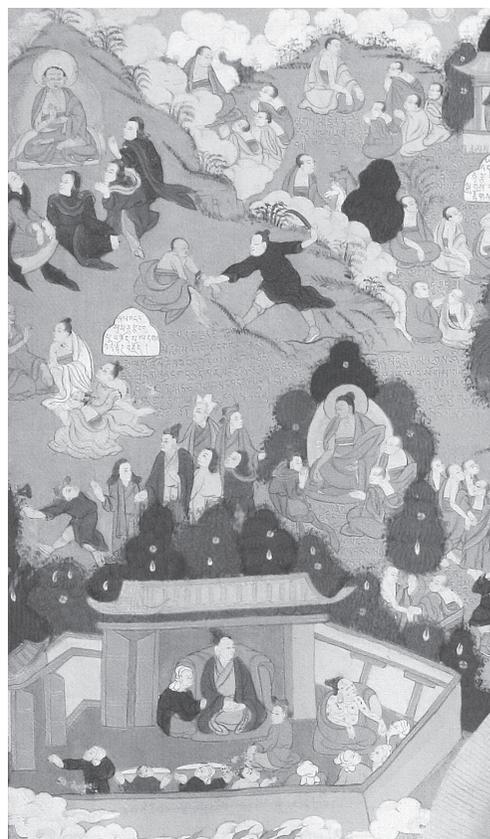


図5 「ナルタンのタンカ」(図4左部分拡大図)

この僧がクシャーンティであることは下に書かれた銘文の「怒ることのないクシャーンティ (khro ba'i skabs bral bzod par smra ba can)」からも明らかである。

2. チベットのタンカセットにおける作例解析

これまでに発表した翻訳と作例解析で、チベットにおける『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』に基づく複数の絵画セットについて明らかにしてきた⁵⁶⁾。それぞれの絵画セットの概要については既発表の作例解析を参照されたい。本稿でも「41幅のタンカ」と、同じ系統にある「ナルタンのタンカ」、および全く異なる系統にある「シトゥのタンカ」を解析する。

2.1 「ナルタンのタンカ」における同定

「ナルタンのタンカ」では、「右12」とされるタンカ(図4)の左部分に「クシャーンティ・アヴァダーナ」の情景を示す(図5:図4の部分図)。釈迦牟尼座像の頭の左に王宮を描き、その上部にドリ(石碑を模した図)があり、その中に「第39章クシャーンティ・アヴァダーナ」と記される⁵⁷⁾。この題字の右下に釈尊が坐し、その周りを合掌する人物と弟子の二人が囲んでいる(図5の中央やや右下)。釈尊の下に書きこまれた銘文から、このシーンは物語の冒頭部分の、釈尊が何かを思い出して微笑んだのをインドラが見て理由を聞いたところ、釈尊がクシャーンティであった時の話をした場面であると同定できる⁵⁸⁾。図5の左上には右手で説法印を示して坐す出家者を四人の女性が囲んでいる様子を

描く。女性たちは青や緑、オレンジ色の水玉模様が施された衣に身を包み、肩からはショールをかけ、長い髪には紐状の垂れる髪飾りをそれぞれ付け、思い思いに話したり合掌したりしている。このシーンは宮廷の女性たちがクシャーンティを見つけ、彼を取り囲むシーンであろう。その下の、王宮の屋根の上に接する箇所には、頭に冠をかぶる王と、その後ろに帽子をかぶった二人の男性従者と、三人の女性が表される。その前にはひざ丈の衣にブーツを履き、手に斧を持つ男が描かれる。このシーンは、女性たちがクシャーンティを囲むのを見て怒った王がクシャーンティの四肢を切らせるよう命令したシーンである⁵⁹⁾。図5中央の上で題字の右上には一人の出家僧が左腕を前に出し、それを前にいる男性が掴み、もう一方の手で刀を振り上げている。出家者の左腕はすでに肘のあたりで切り落とされ、そこから血が出ている。男性は膝丈の袖付きの衣を着てブーツを履くが、頭に冠や飾りがないので、カリ王本人ではなく下手人であろう。その後、四肢を切り落とされたクシャーンティの周りに、森から聖人たちが集まって来て取り囲む。怒る聖人たちをなだめた後、クシャーンティが語る真実語によって彼の四肢は回復する。その場面は、題字の左側の僧衣を着て坐すクシャーンティの前に三人の聖人たちが坐す箇所に同定される⁶⁰⁾。図5下の王宮が表される箇所では、王座に王が座り、その周りに従者や女性などが従っている様子が表されている。王宮の中の右側には、着物が開けた状態で座に坐る人物が表される。その人物には赤い斑点が体中の皮膚に出現している。このシーンは、最後にカリ王が罪という毒で膨れ上がり膿の中にいたという箇所を表すと考えられる。

本タンカに関しては、銘文と絵図はテキストに基づいて表されている。ただし、銘文の内容は原文と異なることはないが、使われる語句は同じではない。また、原文は偈文であるが、銘文は散文となっている。

2.2 「41幅のタンカ」における同定

「41幅のタンカ」セットの中で「右15」とされるタンカの左下部に本アヴァダーナが表されている(図6)。物語の始まりは中央の釈尊座像のすぐ下の樹を背景に釈尊が右手を出して座り、その前にインドラと見られる像と三人の弟子たちが座る箇所から始まる(図7右:図6の部分図)。中央の釈尊座像の左には(図7左上)、出家僧が坐し、その前に四人の女性たちが描かれる。この場面は森の中にいるクシャーンティを見つけて、宮廷の女性たちが周りを取り囲むシーンである。その下に題字を書き込む碑があり、その下に王が従者と女性たちを従えて歩く姿が表される。その先頭には刀を持つ男がいて、後ろを振り返るようである。このシーンは女性たちがクシャーンティの周りにいたことにカリ王が腹を立てて、クシャーンティの四肢を切り落とそうとしたことを表す。再び中央の釈尊座像の左に戻り(図7上)、台座の花弁のすぐ左には、左腕をつかまれて前にいる刀を持つ男に四肢を切られるクシャーンティが表されている。本タンカでは両足と右腕は切り落とされ、左腕からは血が出ている。その下にはオレンジ色の僧衣を着て坐すクシャーンティと、その右に三人の聖仙を描く。この場面は真実語によってクシャーンティの身体が平復したことを表す。最後にその右の王宮の中には、カリ王が中央の座に坐る姿と、その右に全身に赤い斑点を持つ王の姿を描いている。この場面はアヴァダーナの最後の箇所の、王が膿に巻き込まれたことを示す。上記のチベットハウスの作例と本タンカを比較すると、細かい点を除けばそれぞれの場面の描き方はほとんど同じである。しかしそれぞれの場面をタンカ中に配置する方法は異なっている。

2.3 「シトゥのタンカ」における同定

「シトゥのタンカ」では第39章から第42章までが描かれるタンカに表される(図8)。タンカの右上角の一角が本アヴァダーナの情景を示す(図9:図8の部分図)。タンカ中央の右上の釈尊が樹木を背にして右手を地に触れて坐している(図9右下)。その前には二人の弟子がおり、釈尊の話聞くようである。この箇所はアヴァダーナの冒頭部分の、釈尊が前生を思い出して微笑み、クシャーンティであ



図6 「41幅のタンカ」 no.15



図7 「41幅のタンカ」(図6左下部分拡大図)



図8 「シトゥのタンカ」



図9 「シトゥのタンカ」(図8右上部分拡大図)

った過去生の話始める場面であろう。その上のやや左に森があり、その中に一人の男性が禪定して坐している（図9上）。その前に三人の女性が男性に向かって合掌して表される。この箇所は森の中のクシャーンティを宮廷の女性たちが見つけて取り囲むシーンであると考えられる。その森の右に描かれる男性は左手に刀を持ちその様子を眺めている。この人物がカリ王であり、女性たちがクシャーンティとともにいることに腹を立てたシーンであろう。そして、その下に表されるように、クシャーンティの四肢を切り落としてしまう。カリ王の右はやって来た聖仙とクシャーンティである。聖仙の怒りを抑え、真実語によって四肢を回復させたという結末を表すと考えられる。

3. まとめ

チベットでは『ジャータカ百話』が編纂されてから、寺院の壁画などにそれに基づくジャータカを表す作例が残っている。『クシャーンティヴァーディン』のジャータカは元来のアールヤシューラの34話中に所収されており、『ジャータカ百話』のうちの一話としての絵画などの作例が知られている。

『アヴァダーナ・カルパラター』については「ナルタンのタンカ」に書かれる銘文を参照しながらタンカに描かれる全てのシーンの同定を行ったため、正確に場面を同定することができた。銘文は原文と比べて、内容が異なることは見られなかったが、使用する語句は異なる。また、銘文を書きなおした跡が数箇所に見られ、綴りの不明な点や、文法的に正確でない箇所も見られる。いずれのタンカにおいても物語の場面を描く方法に関しては、森の表現や、人物たちの表し方が的確であり、原文の内容と違わない。特に宮廷女性たちの身なりや動作、およびカリ王の行動や感情をよく捉えて正確に描き表している。しかしながら、原文にある春の描写や王と女性たちの戯れは表されない。春の描写は上記の解説に挙げた多くの文献において強調される要素であり、本文献にも含まれている欠くことができない要素である。女性との戯れも同様に多くの文献に含まれており、『アヴァダーナ・カルパラター』においてもクシェーメンドラは比喻を用いて巧みに描写している。本文献の蔵訳ではサンスクリット語にある性的な表現が抜け落ちていた箇所があったが、この点を訳者があえて省略したとすれば、仏の教えをテーマにした説話の中に性的なことがらを具体的に描写したり絵画に描き表したりすることは憚られた可能性がある。

様式の点では、「ナルタンのタンカ」と「41幅のタンカ」は類似しており、「シトゥのタンカ」は全く異なることはこれまで発表してきた絵図と同じである。いずれのタンカも原文の内容に基づいて表されている。

注

- 1) サンスクリット原典からの和訳は引田が中心に行い、蔵訳と絵図の解析は大羽が行った。
- 2) 同様な表現が『中本起経』卷上（大正4, 148c-149a）にも認められる。
- 3) 爾欲照吾信，取断手足耳鼻。著其故处。復者即吾信矣。
- 4) *tvayi tasmān na me kaścīd vikāro 'sti mahīpate /
satyenānena me paśya rudhiram kṣīratām gatam // (29.76)
aṅga-cchede 'py akaluṣi babhūva yadi me manaḥ /
satyenaitena śliṣṭāni tāny evāṅgāni santu me // (77)
iti śuddhadhiyas tasya tīvra-satyopayācanāt /
śliṣṭāny aṅgāni tāny eva sahasā svāsthyam āyayuh // (78)*
- 5) 引田・大羽〔2015: 64-65〕。
- 6) その他，若原〔1994〕，さらにヴェーダ祭祀に関する真実についてはD'Intino〔2015〕を参照。
- 7) *nanu mayā pratipannam āgamiṣyāmīti / tad alaṃ māṃ khalajana-samatayaivaṃ pariśankitum / (p. 212. // 22-23).*
- 8) *lobhena mṛtyoś ca bhayena satyaṃ satyaṃ yad eke tṛṇavat tyajanti /*

- satām tu satyaṃ vasu jīvitam ca kṛcchre `py atas tan na parityajanti // (31.22)
- 9) na jīvitam yat sukham aihikaṃ vā satyāc cyutaṃ rakṣati durgatibhyaḥ /
satyaṃ vijahyād iti kas tad-arthaṃ yac cākaraḥ **tuṣṭi**-yaśaḥ-sukhānām // (23)
 Kern 本は stuti であるが、ここでは Mailand 2009 に従い tuṣṭi と読んだ。
- 10) suṣṭhu khalv ayaṃ **satyavāditayā** ca dhārmikatayā ca vikatthate / tat paśyāmi tāvad asya **satyānurāgaṃ** dharma-priyatām ca / (p. 213, ll. 14–15.)
- 11) athāpi **pratijñātaṃ** tvayā tat-samīpopagamanam atah **satyānurakṣi** tat sampādayitum icchasi / (p. 215, ll. 9–10)
- 12) evam **avyartha-pratijñatā** sampādītā syād ātmarakṣā ceti / (p. 215, l. 20)
- 13) āścaryānām batāścaryam adbhutānām tathādbhutam /
satyaudāryaṃ nṛpasyedam atimānuṣa-daivatam // (31.43)
- 14) mṛtyu-raudra-svabhāvaṃ māṃ vinīta-bhaya-sambhramah /
 iti svayam upeto `yaṃ hī dhairyaṃ sādhu **satyatā** // (44)
- 15) sthāne khalv asya vikhyātam **satya-vāditayā** yaśaḥ /
 iti prāṇān svarājyaṃ ca **satyārtham** yo `yam atyajat // (45)
- 16) Kern 本では -artha- であるが、ここでは Meiland 本に従って -ārya- と読んだ。
- 17) rakṣo-vikṛta-vṛttasya samtyaktārya-pathasya te /
 nāsti satyaṃ kuto dharmah kiṃ śrutena kariṣyasi // (31.49)
- 18) yo nīti-mārga-pratipatti-dhīrāḥ prāyeṇa te pretya patanty apāyān /
 apāsyā jihñān iti nīti-mārgān **satyānurakṣi** punar āgato `smi // (31.54)
 atāś ca nītau kuśalo `ham eva tyaktvānṛtaṃ yo `bhirato `smi **satye** /
 na tat sunītam hi vadanti tajjñā yan nānubadhnanti yaśaḥ-sukhārthāḥ // (55)
- 19) śramād ṛte puṇyagūṇa-prasiddhyā tapāṃsi tīrthābhigama-śramāṃś ca // (31.57cd)
- 20) kīrtir jagad-vyāpti-kṛta-kṣanāyā mārgas trilokākramaṇāya **satyam** /
 dvāraṃ praveśāya surālayasya saṃsāra-durgottaraṇāya setuḥ // (58)
- 21) **satyavrato** bhava visarjaya sattvahimsāṃ bandikṛtaṃ janam aśeṣam imaṃ vimuñca /
 adya na caiva naravīra manuṣya-māṃsam etān varān anavarāṃś caturaḥ prayaccha // (31.80)
- 22) **satyavratatvaṃ** ca kathaṃ syād ahimsakatā ca te /
 aparityajato rājan manuṣya-pīṣitāśītām // (82)
- 23) Śeṣa はヴィシシュヌ神を乗せる宇宙蛇。世界はこの蛇に支えられている。蔵訳は lhag ma bzhin. pāda cd は śleṣa と理解して訳した。kṣamām は「大地」と「忍耐」の2通りの意味がある。
- 24) () 内のコロンの後の語は対応する蔵語訳の語で、必要と思われる箇所原文のままの形で加えた。
- 25) 第1偈の韻律は Rathodhdhatā.
- 26) 第2偈から第3偈までの韻律は Upajāti.
- 27) 原語は prasahya. 蔵訳では, `phra la 「即座に」。
- 28) 第4偈の韻律は Indravajrā.
- 29) 原文は tavādbhuteyam だが、意味がいまひとつはっきりしない。ここでは de Jong に従って tavādbhutāya と訂正して読んだ。
- 30) 第5偈の韻律は Upajāti.
- 31) pāda a の原文は śrutveti vākyam tridaśeśvarasya tat であるが、ここでは Indravajrā もしくは Upajāti の韻律が期待されているので、1母音分余る。最後の tat が余るか? ここはおそらく Indravajrā の韻律であろう。
- 32) 原語は yo `bhūd bhuvo であるが、de Jong に従って yo `bhūd bhave と訂正した。蔵訳は, srid [pa] la.
- 33) 原語 aravinda は「昼間に咲く蓮華」。蔵訳では pa dma 「紅蓮華」。Apte の辞書は sūryāṃsubhir bhinnam ivāravindam という Kumārasambhava 1.32 をあげる。
- 34) 第6偈から第12偈までの韻律は Upajāti.
- 35) 蔵訳にはない。
- 36) 女性の足蹴りによって花開くアショーカ樹、女性の口に含んだ酒をかけられて花開くバクラ樹については Apte の辞書を参照。
- 37) pāda ab の原典は ... pavanākulālī ... stabakā latānām / であるが、ここでは de Jong に従って ... pavanākulānām ...

- stabakānatānām / と読んだ。
- 38) ここでは女性の姿とつる草の様子が対比されて描写されている。
- 39) 第13偈の韻律は Indravajrā。
- 40) 原文は krūrataram であるが、ここでは de Jong の読みに従って krudhdharam とした。
- 41) 第14偈から第18偈までの韻律は Upajāti。
- 42) 仙人、特に苦行者は苦行の力により、怒った相手に呪いをかけることが出来る。原〔1972: 11〕を参照。
- 43) 原文は pretya sadodayena であるが意味がとりにくい。ここでは de jong の提案のように、satya-padodayena と訂正して訳した。対応する蔵訳は、bden tshig brjod pas 「真実語が述べられたので」。
- 44) 原文の sattva は triguṇa のうちの一つの「純質」。
- 45) 原文は pūrotkaṭa- であるが意味がとりにくい。de jong に従って、pūyotkaṭa と訂正した。対応する蔵訳は、rab drag mag 「ひどい膿」
- 46) 第19偈の韻律は Indravajrā。
- 47) 第20偈の韻律は Upajāti。
- 48) インドラ神は別名「千の目をもつもの」(Sahasrākṣa) と呼ばれる。
- 49) 第21偈の韻律は Hariṇī。
- 50) 重要な作例としては、インドのアジャンター石窟(第2窟ヴェランダ左室後壁)壁画のほか、キジル石窟(第114窟主室窟頂左)の壁画、インドネシアのボロブドゥール遺跡(第一回廊欄楯上段)のレリーフ等の作例がある。
- 51) 本稿では以下を参照。Slob dpon dpa' bo dang karma ba rang byung rdo rje gnyis. *Gangs can rig brgya'i sgo 'byed lde mig—skyes rabs brgya ba*, 民族出版社, 北京, 1995年, 207-220頁。
- 52) アールヤシューラの『ジャータカマラー』: 東北 No. 4150, 北京 No. 5650, ハリバッタの『ジャータカマラー』: 東北 No. 4152, 北京 No. 5652.
- 53) Thub pa de'i lag pa g.yas pa cung zad bsgreng ste/ dgag pa'i phyir sor mo ni phra zhing ring ba bkram pa dang/ ral gri rnor pos padma'i rtsa ba bzhin du mkhregs ma bcad de/ 前掲書217頁。『ジャータカ百話』では、最初に聖仙の右手首を斬った後に、もう一方の手と両方の腕と耳、鼻、両足を斬ったとある。前掲書218頁参照。
- 54) Rgyal po de sa gas pas 'jigs pa'i sgra byung la/ me 'bar ba 'khrug pa de'i nang du song nas/ 前掲書218頁。
- 55) この部分を「釈尊の百の事績」とすることがあるが、これは誤りで、大回廊の内壁の一区画に銘文があり、カルマパ・ランジュンドルジェの『ジャータカ百話』に基づくと明確に記されているため、容易に同定できる。パネルの1から8(『ジャータカ百話』の第一章から第七章まで)の銘文は以下で確認できる。Tropper, Kurt. *Die Jātaka-Inschriften im skor lam chen mo des Klosters Zha Lu : Einführung, textkritische Studie, Edition der Paneele 1-8 mit Sanskritparallelen und deutscher Übersetzung*. Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität, Wien, 2005.
- 56) 引田・大羽〔2015〕。
- 57) “Yal 'dab sum cu rtsa dgu pa bzod pa la dga' ba'i rtoṅs brjod” 「第39章忍耐を好む者〔クシャーンティ〕の आवेダナ」
- 58) 銘文にあるのは判読可能な限り以下の通り。“Rgyal ba nags khrod du ... zhing 'dzum par ... lha'i dbang pos rgyu zhus pas bzod pa la dga' bor skye ba gzhes pa'i rab gsung pa / ” 「勝者〔釈迦牟尼〕が森で……して微笑んだのを……インドラが理由を尋ねたのでクシャーンティとして生を受けたときの話をされたこと」
- 59) 題字の右隣にある銘文の三行目までは以下の通り。“Rgyal po rtsong ldan gyi btsun mo rnams bzod pa dga' ba la dad pas rgyal po khros te bzod dga'i yan lag bcad pa” 「カリ王の王妃たちがクシャーンティを信奉していたので王は怒ってクシャーンティの四肢を切断したこと」
- 60) 題字の右隣にある銘文の四行目からは以下の通り。“Drang srong gzhan dag dmod por [=mor?] bar rtsams [=rtsoms] pa na nga byed pa po la khro ba skad cig kyang med bden pa des lus sos par gyur cig gsungs pa bzhin sos so / ” 「ほかの聖仙たちが呪いをかけ始めたところ、「私人に怒りの感情がほんの一瞬すらないという真実〔語〕によって身体よ、回復せよ」と言った通りに回復した。」

参考文献

東北:『西藏大蔵経総目録』仙台, 東北帝国大学法文学部, 1934年.

北京：『影印北京版西藏大藏經総目録 大谷大学図書館蔵』東京，鈴木学術財団，1961年。

頼富本宏，宮坂宥明監修．2001．『西藏図像聚成 ショール版八千頌般若経図像集』四季社．

Forty-one Thangkas from the Collection of His Holiness the Dalai Lama: Past Lives of the Buddha. 1980. Paris: Editions Sciaky.

Padma-chos-'phel, Deborah L. Black, and Kṣemendra. 1997. *Leaves of the Heaven Tree: The Great Compassion of Buddha*. Berkley: Dharma Pub.

Rhie, Malylin M. and Thurman, Robert A. F. 1999. *Worlds of Transformation: Tibetan Art of Wisdom and Compassion*. Harry N. Abrams [distributor].

rTogs brjod dpag bsam 'khri shing gi snyan tshig gi rgyan lhug par bkrol pa mthong ba don ldan. 1981. Delhi: Karmapae Chodhey.

図版出典

図 1 (Rhie and Thurman 1999) 91 頁

図 2 図 1 部分図

図 3 頼富・宮坂編 404 頁

図 4 Tibet House New Delhi 提供の画像ファイルを画像処理して作成

図 5 筆者（大羽）が Tibet House New Delhi における現地調査で撮影した画像を画像処理して作成

図 6 Sciaky 版 (Forty-one Thangkas 1980) 通し番号15

図 7 図 6 部分図

図 8 (Padma, Deborah and Ksemendra 1997) 192 頁

図 9 図 8 部分図